

今週のメニュー

■トピックス

◇ “火事と喧嘩は江戸の華” というけれど、“大火に学ぶ防火への取組み”

■随想

◇2005年シリア旅行記 (5) 水車

元一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

■トピックス

◇ “火事と喧嘩は江戸の華” というけれど、“大火に学ぶ防火への取組み”

1. “火事と喧嘩は江戸の華” というけれど

・NHK大河ドラマは大火から始まった

1月5日からのNHK大河ドラマ「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺」は、明和の大火のシーンから始まりました。この明和九年（1772年）の大火は、江戸の三分の一を焼き、死者数は約1万4千人、行方不明者数は4千人という被害を出したといわれ、江戸三大大火の一つとされています。ご存じのとおり江戸の火事の多さは、ともに三都と称された京都や大坂と比べても際立っていました。しかも江戸の気候上の特性（夏は雨、冬は晴天が続き乾燥する）から大火になることが多く、大火は3月に多く、4月以降は極端に減り、8月には起きていません。

江戸の十大火事（網掛け三大大火）

	発生年月日	呼称	被害状況
1	明暦3年（1657） 1月18～19日	明暦の大火 振袖火事ほか	焼失町数500余、死者10万人を超えるとの説もあり、江戸城も焼く江戸史上最大の大火
2	天和2年（1682） 12月28日	お七火事	八百屋お七の放火といわれ、大名75、旗本166、神社47、寺院48を焼く
3	元禄11年（1698） 9月6日	勅額火事 中堂火事	新橋から出火、南風で千住まで延焼、町屋18,703、326カ町を焼く
4	元禄16年（1703） 11月29日	水戸様火事	小石川の水戸家屋敷より出火
5	享保2年（1717） 1月22日	小石川馬場火事	武家屋敷より出火、大名、旗本の邸宅をはじめ、町屋200カ町あまり、死者100余人
6	明和9年（1772） 2月29日	目黒行人坂火事	目黒大円寺より出火、千住まで延焼、翌日鎮火するも、本郷から再出火、死者14,700人、不明者4,060人あまり
7	寛政6年（1794） 1月10日	桜田火事	麴町平河町より出火、虎ノ門から芝まで延焼
8	文化3年（1806） 3月4日	車町火事・牛町火事 事・丙寅火事	芝車町から出火、浅草まで延焼、諸侯邸宅80余、寺社80余、町数530余全焼、死者は1,000人を超える
9	文政12年（1829） 3月21日	佐久間町火事 己丑火事	神田から出火、江戸下町の中心部が焼失、武家屋敷・町屋37万軒が類焼、死者2,800人余、明和の大火以来の大火
10	安政2年（1855） 10月2日	地震火事	「安政大地震」によって市中各所から出火、主な火元は30カ所、死者3,895人

* 「1657年明暦の江戸大火報告書」P14表1-1より編集作成

徳川家康が天正 18 年（1590）に江戸に入府して以来、江戸史上最大の大火といわれる明暦の大火まで（67 年間）に 140 件もの火事が発生したとのことです。まさに「火災都市」の様相を呈し、江戸の町の歴史は火災との闘いであったといえます。火事がこれだけ多く発生する特有の気候としては、冬から春先に冷たい「空っ風」が吹き続け、数十日も雨の降らない乾燥状態が続くことと、春先に「春一番」という南風が吹くことがあげられています。特に北風が吹いた時の火災が一番恐ろしかったとのことです。

・江戸史上最大の大火「明暦の大火」

明暦の大火の特徴について内閣府の中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」がとりまとめた「1657 明暦の江戸大火報告書」（以下、「明暦の大火報告書」）には次のように記されています。

「江戸の消防体制は・・・大名火消の制度や町人の消火体制が徐々に形成されつつあったとはいっても、実際にはいったん火がつくと延焼を食い止めることができずに大火になってしまうことが多かった。・・・消火活動としては、燃えている家屋は放置し、その周辺にある家屋を破壊して延焼を止めようとする、いわゆる「破壊消防」に頼らざるを得ない状況であった。」

「明暦の大火の時期では、江戸に存在した建物自体がきわめて燃え易い構造であり、鎮火は風がおさまったことによるところが大きく、川や運河、海による焼け止まり以外には効果的に消火した例はないに等しい。」

明暦 2 年（1656）の年末から翌 1 月にかけて 80 日以上も雨が降らず、小規模な火災が多発していたといえます。1 月 17 日から北西の風が吹き、18 日午後に西風になり、乾燥という出火しやすい条件と延焼速度を速める強風という 2 つの悪条件が重なり、被害を大きくしたといえます。

VEC は靈巖島の上にある

明暦の大火は明暦 3 年（1657）1 月 18～19 日（太陽暦では 3 月 2～3 日）にかけて発生した 3 件の大規模火災の総称です。最初の火災は本郷丸山の本妙寺から出火し、北西の強風により湯島から駿河台方向に広がっていききました。鎌倉河岸を焼き、神田明神から烈風で乱れ飛んだ火は、神田川南岸一帯を焼き払ったのです。夕方から西風になり、鎌倉河岸の火は遠く隔てた鞆町へと飛び火、東に延焼、川を越え、茅場町、八丁堀まで達して靈巖寺のある靈巖島へと広がり、寺に逃げ込んだ 9,600 人余りが亡くなったといえます。この火は海を隔てた佃島や石川島にまで飛び火し、隅田川を隔てた向島八幡宮も焼失、さらに西風に煽られ遊郭の吉原も焼けてしまいました（NHK の大河ドラマでも吉原が燃える話でした）。

いま VEC のある中央区新川地区は、かつて靈巖島といわれていた場所で、寛永元年（1624）に雄誉靈巖上人によって埋立て・造成されました。毎日、VEC に向かって渡っている橋の名前が「靈岸橋」であるいわれを初めて知りました。



2. 災害に学ぶ防災・防火

・明暦の大火の教訓

「明暦の大火報告書」によると、明暦の大火の最大の特徴は飛び火による延焼拡大の速さと被害規模の大きさです。要因としては乾燥と強風があげられますが、当時の消防力不足、住宅・建物の構造、建築素材等の影響から風下側への飛び火が極めて速く直

線的に進んだことです。

明暦の大火の後、さまざまな防災への試みが実行に移されました。具体的には、武家屋敷等の移転、延焼防止帯の設置、城内延焼対策としての神社の移転、道路拡張、火除地、広小路、防火土手の設置や耐火建築の導入などが実施されました。そのなかで耐火建築についてみると、万治3年（1660）1月には、焼け出された人が小屋を造るときは、茅葺きなどの燃えやすい素材を禁止し、塗屋や蛸殻葺きなどの耐火建築を推奨する町触が発令されています。また、瓦が落下して多数の怪我人が出たことから、倉庫だけに瓦屋根が認められました。茅葺きや藁葺きの屋根に対して幕府は防火のため、再三、土で屋根を塗るように通達しました。寛文元年（1661）には新規に茅葺き等の家を建てることを禁じ、以後、板葺きにする触を出しました。しかし、江戸で本格的な防火建築の導入は享保5年（1720）に土蔵・塗屋造りの普及が推進される時代まで待たなければならなかったのです。



明暦の大火の供養塔

・地震と火災

日本は古くから木造建築物が中心で、とくに市街地では狭小な木造住宅が密集しているところが多くありました。そういった地域でいったん火災が発生するとしばしば大規模火災につながりました。江戸時代（約270年間）における大火は90回近くあったといえます。

明治になり、近代国家になってからも神田や日本橋は火事の多発地帯でした。明治5年の銀座の火事は95万㎡以上焼失する大火となりました。これを機に不燃建築による都市改造を目指し、明治6年に銀座の煉瓦街が誕生しました。耐火構造の建築物が導入されたもののそれでも多くの建物は木造建築のままで明治、大正、昭和初期にもいくつもの大規模火災が発生しました。（関東大震災については、コラムを参照）

戦後も大火（焼損面積3万3,000㎡（1万坪）以上）の火事は続き、昭和20年代には20件もの大火が発生しました。30年代も大火の時代で、ほぼ毎年の15件発生しています。一方、40年代になると大火は大幅に減少（4件）し、死亡者が出ておらず、消防力の充実、効率的な消火活動による高い延焼阻止の結果とされています。結果として1970年頃まで市街地大火はほとんどなくなりましたが、一方で地震などの災害が生じ、消防隊が機能しない場合には市街地大火につながってしまうことが課題とされています。

このように大火、大地震、さらには戦災により日本の都市部が焦土になるような大きな代償を払いながら、多くの教訓を得て復興してきました。それでも、木造住宅の密集地や裏路地の多い地域では、消防車が入れなかったり、避難ルートの確保ができなくなったりしてしまっていることが起こっています。先日、日本経済新聞に「遅れる「木密」防火対策 消火設備の優先導入9%」という記事が出ていました。能登半島地震では木造の建物が集まる「朝市通り」で大規模な火災が発生しました。記事によると延焼しやすい木造住宅密集地域（木密）の防火対策が進んでおらず、消火栓や防火水槽といった消火設備を他の地域より優先的に取り入れる消防本部は対象地域の9%にとどまることから、密集の解消に加え、初期消火を促す取り組みが欠かせないとしています。

関東大震災の教訓

何度も大火を経験した江戸は、明治維新以降、東京防火令の公布、都市計画法・市街地建築物法の施行などにより大きな火災は減少していました。しかし、大正12年(1923)9月1日11時58分の地震発生直後から同時多発的な火災に見舞われ、地震による断水もあり、延焼しながら9月3日午前10時に鎮火するまで46時間にわたって燃え続けました。市街全面積の43.6%を焼き、多くの犠牲者が出ました。特に当日は日本海に弱い台風があり、火災発生時には風速10mを超える強風が吹き、しかも南風から西風、北風、再び南風と風向きが変わりつづけたことが延焼範囲を拡大し、避難者の逃げまどいを生じさせてしまったとのこと。大震災ではありませんが、10万5,000人の犠牲者のうち9割が火災によるとされており、東京の大火災ともいえます。

関東大震災の教訓として、防火対策が進められました。東京では用途地域の指定や耐火構造を要件とする防火地区が指定されました。都心では鉄筋コンクリート構造の建物が建設され、木造建築でも看板建築という軒を廃止して建物前面に銅板やモルタル、タイルなどの不燃性材質で覆った建物が生まれました。

(参考 内閣府「ぼうさい」107・108号 特集「関東大震災から100年②③」)



関東大震災の供養塔



和泉町に建てられた防災守護地の碑
関東大震災で奇跡的に延焼を免れた神田和泉町・佐久間町は住民たちの必死の消火活動に加え、西側に駅、南側に神田川、北と樋勝は不燃建物に囲まれ、木造密集(木密)市街地と接していなかったことやポンプ所が前年に完成したことなどが幸いした。

(つづく)

参考文献

中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会「1657 明暦の江戸大火報告書」2004.3

中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会「災害史に学ぶ」2011.3

内閣府 「ぼうさい」2023 No.106~108 「特集 関東大震災から100年①~③」

消防庁「令和5年(1~12月)における火災の状況(確定値)について

一般財団法人 消防防災科学センター開設・運営「消防防災博物館」(インターネット上の仮想博物館) 消防の歴史

◇2005年シリア旅行記 (5) 水車

元一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

砂漠地帯が多いシリアですが西アジアで最も長い川である「ユーフラテス川」が流れています。トルコを源流とする「ユーフラテス川」、シリア、イラクを通りペルシャ湾に流れ込みます。

上流、トルコでは複数のダムが建設され、以前と比べ流量が減り水利権を巡り国際的な問題にもなっていますがシリア領内では他の3つの川も「ユーフラテス川」に合流しそれなりの水流は保っています。

しかし、内戦により灌漑施設が破壊。内戦前は食料自給率 100%と言われていた農業に壊滅的な損害が出ています。

2011年市民運動を発端に始まったシリア内戦、政府軍と反政府軍の衝突に拡大、この混乱にイスラム過激派 ISIL やヒズボラ、シリア国内に住むクルド人勢力も参戦。更に反政府軍を支持するアメリカや EU を中心とした多国籍軍、政府軍を支持するロシアやイランが介入。

これに反クルド政策を掲げるトルコ、シリアの隣国で内戦の影響を恐れるイスラエル、レバノン、カタールやサウジアラビアなど中東諸国も加わりシリアの内戦からこれまでにない「新しい戦争」と呼ばれる状態に陥りました。

この間、国連、赤十字国際委員会をはじめ様々な国が停戦調停を試みましたが参戦した各国、組織があまりにも多く、かつ、複雑な力関係になっていたため何れも失敗していました。

ところが2024年12月5日、政府軍が掌握し今回の旅行記の滞在場所である Hama を反政府軍が制圧。

12月8日、反政府軍がダマスカスに侵攻を始めると1970年から親子で50年以上シリアの実権を掌握していたアサド政権はほとんど反撃をすることなく崩壊。

アサド大統領はロシアに亡命しました。

これによりシリア国内では反政府勢力を中心に内戦に参戦していた国内の各勢力が停戦協定を締結し武力に頼らない新しい国作りを行っていくことで合意しました。

しかし、各勢力の力関係、イスラム教徒とキリスト教徒の対立など根深い問題があり安定した新政権の誕生には至っていません。

また、内戦は一応停戦となりましたが終わらないのは隣国イスラエル。

アサド政権崩壊によりシリアと締結した協定は無効になったとしてシリア国内に侵攻。軍事施設やその関係施設などに空爆を行っています。

10年以上続いた内戦により市民生活が崩壊しただけではなく支持した勢力により多くの分断が生まれているようです。

いまでも連絡を取っているシリアの友人たちがいます。出会った頃は信仰している宗教がイスラム教、キリスト教でも気にすることなく仲良く暮らしていました。

ところが最近のメールを見ると「あのイスラム教徒たち」「我々キリスト教徒は」など明らかに宗教を意識する言葉が増えています。

また、「〇〇さんはアサド政権の人」「△△さんはアサド政権と勇敢に戦った」などの表現も多くなっています。

新政権が発足したシリアですが本当の国内融和はまだ当分先のことになりそうで当分は不安定な状況が続きそうです。

今回、滞在しているシリアの地方都市 Hama。名物は市内 14 ヶ所、17 基ある巨大水車。最初の水車は東ローマ帝国時代に建造されたそうです。

Hama の水車、1999 年 8 月、世界遺産の「暫定リスト」に登録されていますが正式な世界遺産には登録されていません。

国土が全体的に乾燥しているシリアでは水は貴重品。

その水を川から効率的に汲み上げるために作られました。現在は灌漑用水やポンプが整備されたため現役で灌漑用として使われている水車はごく一部。ほとんどは街のシンボルとして親しまれています。



水車とはいってもその大きさは日本のものとは大違い。

直径は 20 メートル以上あり、古いものは 500 年ほど前に作られました。

木製の水車が 500 年持つのは驚異的で日本からも木造建築の専門家が調査に来たことがあるようです。でもよく見ると結構補修の跡が。。

流石にこの大きさの水車が回るとギーギー、ギシギシ、かなり大きな音がしていますが、気にする人はいません。

水車の保守をするためか木工職人が多く住んでいるようで他の都市と比べると木工工場が多い気がします。工場と言ってもほとんどが家族経営の小さなものです。店の前にはそこで作られた木製家具やおもちゃが並べられています。

この水車と水が豊富な川のおかげで、どこでも洗濯物がすぐに乾く旅行者には嬉しい乾燥したシリアですが、街には緑が多く、ちょっと他の都市とは趣が異なります。

Hama、一見すると平和な農村地帯ですが 1988 年、イスラム過激派とシリア政府との間で行われた戦闘地帯となり、その巻き添えで 2 万人以上の方が亡くなりました(調査によっては 3~4 万人という集計もあります)。

いまでは街を歩いていてもその痕跡はほとんどなく、建物の外壁に銃弾が当たった後がある程度。ノンビリとした田舎町です。

日中非常に暑いシリア。朝から開店していたお店は午後 1 時過ぎから一旦閉まり始め、夕方 5 時頃再開店。夜 10 時頃まで営業をしています。

このためシリアのお昼ご飯は午後 2 時~3 時頃。夕食は午後 8 時以降が一般的でレスト

ランのお客さんのピークは午後10時頃。レストランやカフェは夜中までやっています。

最近ではテレビやDVD、子ども達はテレビゲームが娯楽の中心になっていますが、それほど種類も多くなく、やはり家族の娯楽は日中の暑さもおさまった午後7時頃からの家族でのそぞろ歩き。夕食を持ってきてライトアップされた夜の公園で食事をする家族連れのも大勢居られます。日本ではほとんどなくなった家族の団欒がまだ残っていました。

これだけ水が多い Hama。
蚊や虫が多いだろうと覚悟をしていたのですが、全くといっていいほど見掛けません。ハエも日本より少ないくらい。
逆にテラスレストランで食事していると沢山のハチがジャムを求めて飛んできます。見た目はミツバチなのですが大きさがかなり大きい。最初はスズメバチが大挙して飛んできたのかとビックリしました。
たまたま知り合った Hama の学校の先生に聞いたところ「水の中をよく見てごらん。ほら、魚が沢山いるでしょう。この魚が蚊の子ども（ボウフラ）などを食べてしまうのです。それに気温が高いため水はすぐに蒸発するので溜水がないことも虫が少ない理由です」と教えてくれました。
魚の住めないところでも蚊は（ボウフラは）住める。
蚊の多い場所は自然が破壊されたところだ、というようなことも言っていました。

（続く）

次回は、（6）秘密警察 です。

⇒ [バックナンバー](#)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <https://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp